

# どんびま

2008年5月7日発行  
発行所 椈の湖農業小学校

## 田毎の月

善光寺の「仏」が北京オリンピックの聖火リレーの出発地を辞退したのは当然の成り行きと言えよう。

リレー騒動がマスコミを賑わせた前後、信州を旅してももちろん「蕎麦」も食べた。桜の名所として知られる高遠城址で、堀の中の池に散った花びらと水面に映る桜にカメラを向けながら、ハッと気がつき考えた。

「信濃では月と仏とおらが蕎麦」の句で、うかつにも「月」は秋を連想し、ただ風光明媚を自慢したものと思ってきたが、月が田に映るのは田植え時しかないと感じてみると、「田毎」は風景でなく、信州人の勤勉な気質を主張したものではないのかとさえ思えてきたものだ。

桜の樹間に垣間見る中央アルプス連峰の白い輝きが目に残った。 (草)

## 5月授業日のご案内

日程	5月18日(日)
受付	9:00 ~ 9:30
始めの会	9:30 ~ 9:40
授業(畑仕事)	9:40 ~ 11:30
	草取り・土寄せ・苗植えなど
昼食	11:30 ~ 13:00
授業(田植え)	13:00 ~ 15:00
	田植え後バケツ稲の説明と土・苗を配ります。
終わりの会	15:00 ~ 15:15
締め切り	5月14日(厳守)
	問い合わせ・緊急連絡

TEL 0573-75-4417 ・ 090-5110-9362 (山内總太郎)

TEL 0573-75-2109 (椈の湖自然公園管理棟) 当日のみ



ヒメオドリコソウ スケッチの時期が遅かったので、特徴が顕著でないが、早春頃は茎上部の葉が密についた部分は赤紫がかっており、その間から薄紫色の花を多数つける。畑等に蔓延る厄介ものです。欧州からの帰化種。

**服装** 作業のできる服装  
**持ち物** 手袋、タオル、長靴、雨具、買い物袋、お茶、箸、食器着替え(天気がよくても)  
**郷土料理** 草餅、ぼた餅、みそ汁等  
かぼちゃの苗は1本持参して下さい。それぞれの名札を立てて、かぼちゃ畑に植えます。  
田植えは雨が降ってもやります。天気が良くても泥んこになります。バケツ稲用の土を配ります。10リットル位のバケツをお持ち下さい。

～とくちゃんの農小レポート～

## さくらふぶきと花もも満開のなかで

いつもの年に比べて今年は全体に花の咲き方が早く、おまけに昨年より5日遅く行われた「桜の湖さくら祭り」でしたので、ソメイヨシノは見ごろを終わっていましたが、咲分けの花桃は満開を迎えていました。

- 1 始めの会。 校長先生から農業体験と食育の大切さについてと、特に今年から入学された生徒さんや保護者の方に、この学校のなかで思う存分、野菜や米作りそして郷土食などを体験するようお話がありました。
- 2 先生の紹介。 先月お休みの生徒さんのために、グループ担当の先生がそれぞれ紹介されました。早く名前を覚えてくださいね。
- 3 授業。 畑の仕事。 キャベツ、ブロッコリー、サニーレタス、レタス、ねぎの植え付け。 似たような苗がありますので良く観察して下さい。 ごぼう、大根の種まき。ごぼうは大きく育った後は11月に掘りとりが卒業試験？となりますのでお楽しみに！
- 4 昼食。 竹の子ごはん、かき玉汁、わけぎ味噌和え、人参昆布、天ぷら。今回は桜の湖行きのため早目のお昼ご飯となりました。
- 5 持ち帰り。
  - \* プランターと土とサニーレタスの苗。サニーレタスは少し育ってきたら外側の葉っぱから欠いて食べるようにしましょう。
  - \* かぼちゃの種とポットと土。苗を育てて農場に持ち帰り、畑に名前をつけて植え付けますので丈夫な苗に育てて来て下さい。
  - \* 稲の種籾、稲を種から育てる体験用のセットです。
- 6 桜の湖さくら祭りに参加。 例年のように午後からは「桜の湖さくら祭り」に参加し、イベントやビンゴゲームを楽しみました。

### \* ギフチョウの標本写真展示（宮下先生提供）

カンアオイと云う植物を主食とする、蝶の中でも大変珍しい種類で、今では絶滅危惧種に指定されています。宮下先生はギフチョウの繁殖をされていた方ですので詳しく勉強されています。

これからの季節桜の湖あたりは盛んに蝶が舞うので、興味のある人は期待が持てるでしょう。

～とくちゃんのちょっと一言～

作品展示について保護者の方からの申し出が一件ありました。桜の湖農小も農業体験と食育、そして物つくりと、年々実績を高めてきております。自分で作った作品を他人に見てもらうのはとても大切な事だと思います。多くの方の参加を望んでいますので、どしどしお申し出くださいお待ちしております。

～ 安保兄の百姓ばなし～

## 田 植 え

水をはった田んぼは、大きな鏡のようになる。いっせいに青葉若葉があふれた山々を映している。この地方ではいよいよ田植えシーズンである。

ゴールデンウィークは農村では1年で1番忙しい。畦の草刈り、田起こし、代かきなど大部分は機械化されたとはいえ、小さな段々の田は手仕事も多く、家族総出の農作業となる。

日本の地形を見たヨーロッパの人たちは、日本の川は滝のようだというそうだ。その急流を地形に合わせて横に流す、つまり、段々にした田に水をはる。水田は小さなダムとも言われ、治水・利水の点からみてもすばらしい文化だといわれている。

百姓の先人たちは、食うため生きるために、人馬がやっと通れる山奥まで、急な斜面を掘り、石を積み、田んぼを作り続けてきた。今、ところによっては棚田の景観が観光資源として見直されたりしているが、それを拓き、そこを耕してきた人たちの苦勞を思い浮かべると百姓の安保兄は複雑な気分になる。

椀の湖農業小学校、5月授業日のメインは田植え。

なんといっても日本の主食である米。米という字は八十八と書くように、米には88回も手がかかると言われている。その中でも一番の大仕事が田植えだ。

安保兄も最近知ったことだが、なぜ「田植え」というのか。

先月はブロッコリーやネギの苗を植えたが、ブロッコリー植え、ネギ植えと言い「畑植え」とは言わない。そのことから言えば稲の苗を植えるのだから「稲植え」でいいはずだが。

元来、百姓は稲を「つくる」とは言わない。稲は育つもの。それも、稲の力だけで育つのではなく、自然の力を借りて育っていく結果、稲は「できる」「とれる」と言う。

米を「つくる」というのは、人間がすべてやってきたという気持ちが強く、工業の発想になる。それに対して「できる」「とれる」という言葉は、人間が世界の中心の主役ではなくて、自然に生かされている生き物の一員だと言う感覚から生まれた言葉だという考え方だ。

つまり、百姓の先人たちは稲だけを見ていたのではなく、自然を見ていたのだ。稲は自然の恵みで育つものだから、その準備を百姓が行う。稲の育つ田を準備するという意味で「田植え」というのだと教えられた。

百姓は稲をつくるのではなく、「田をつくる」のだ。

以前、フィールドフォークの活動のなかで、陶芸家の加藤元男先生が言われた言葉を思い出した。「昔から職人は瀬戸物を焼くとは言わず、窯を焼くと言う。」

そこには「田をつくる」「田植え」と同じく、人間の力を超えたものに対する畏敬の念と、ものづくりに対する謙虚さが込められていると思う。

今年の出来は？ どれだけとれるか？

毎年同じようにしても、収穫できないことがある。

毎年百姓一年生の安保兄。

一年生同士が泥の中で学ぼう。